



# 蒲田交信局



皆様こんにちは。平素より株式会社 城南村田をご愛顧いただきまして、誠にありがとうございます。先月に引き続き寺田 匠児でございます。第2回目の蒲田交信局ということで今回は、私のこれまでの人生において何かと影響を与えてくれた母の話を書きたいと思います。稚拙な文章ではありますが、どうぞお付き合いください。

私の母は、18歳から1年間、当時としては珍しくアメリカに留学していたという経歴の持ち主です。そのため、幼少期の頃からよく英語圏に海外旅行に連れて行ってくれました。にもかかわらず、残念ながら私は文系のクセに英語が大の苦手(笑)大学も文系ではありますが英語を全く必要としない社会学部に進学。ゆくゆく英語とは無縁の生活に突入したところに、転機が訪れました。

## 「短期交換留学制度、利用者募集」

英語に無関心な私も「1カ月アメリカで遊べる」と言われれば別の話。すぐに応募したのですが・・・サボっていたせいで文章問題など解けるはずもありません。絶望的かと思われていたアメリカ短期留学への切符に唯一残された道は英語の聞き取り問題のみ。「どうせ分からないだろう...」と半ば諦めムードで勉強に臨んでみると...なんと、スラスラと英文の意味が頭に入ってくるではありませんか! 「あれ? このフレーズ、昔聞いた英語の曲で使われてたな?」...そうなんです! 母は私が小さいころから家のBGMに洋楽を流していました。聴いたままを鼻歌代わりに歌っていた幼少期の私。その後の英語の勉強の中で、気付かぬうちにその意味まで頭に入り残っていたようなのです。いや、これには私も完敗。それからは本腰を据えて英語の勉強に励み、見事、学内20名限定の交換留学生に選ばれました。

母の「子どもに対する想い」と言うのは、どんな意志の力よりも強いものであると考えさせられてしまいます。そんな母が留学の際にくれた言葉。「英語を話せば世界の半分の人々とコミュニケーションが取れるようになるのよ。世界の半分以上を相手にできる人間になって帰ってきなさい」 私は世界の半分以上を相手に、日々闘っているのでしょうか? 今一度、自分自身に問い直して、日々の仕事に励んでいきたいと思ひます。



株式会社 城南村田 かわら版

# 蒲田交信局



いつもお世話になっております。営業部の川原です。今回は“家族の思い出”について書かせていただきます。我が家は、各々単独行動が多く、かなり昔の数少ない思い出の中から1つ紹介させていただきます。息子が小学生の時までは家族全員でGWとお盆に富山に帰省するのが楽しみでした。お盆の帰省の時の話ですが、高速道路の大渋滞にはまり、何とか一般道に降り車がスイスイ動き出したのは夜中も1時を過ぎた頃でした。場所は長野県の松本市周辺で富山まではまだ3時間位はかかる所で、運転担当の私の疲れもピークに来ており、一旦休憩をとることにしました。あたりは家1軒もない閉店後のレストランの駐車場に車を止め仮眠をとることにしました。シートを倒し休もうとした時に息子が“向こうで光っているのは何？”と声をかけてきました。最初はその物体がどこにあるのかも分からないまま、疲れもあり“星じゃない？”なんていい加減に答えていましたが、また息子に“だんだん近づいてくるよ？”と言われよく見てみると、確かに白い光がゆらゆら揺れてこちらの方に向かってくるではありませんか。星ではない。それでは一体何？私の疲れは一機に吹っ飛び、頭の中では“ああ、ついに出会ってしまった火の玉と！！！！”。ただじっとその物体を見つめて固まってしまいました。助手席の息子はどうしていたかは覚えていません。少し経ち、その物体の正体が分かったときには、本当に体の力が抜けました。こんな時間に人家のない場所でライトをつけながら自転車に乗ったおじさんがゆっくりと通り過ぎて行ったのです。ほっとして、後部席にいるかみさんと娘に目をやると、なんと2人とも大きな口をあけ、天井をむいて死んでいるかのように眠っているではありませんか。(怖わっ！)眠気も吹っ飛び、休憩もやめ、音楽のボリュームをあげ、その後ひらすら運転し続けました。息子は現在社会人で、かなり昔の出来事でしたが、私自身は今でもこのことを鮮明に覚えています。

以上